

ブリッジ・カレッジ「学問の世界へようこそ」を担当して (1) —大学への期待に応えるべく—

基盤教育院 海津 淳

2009年2月、桜美林大学への入学が決まった学生を対象に入学前教育としてブリッジ・カレッジが実施され、私は「学問の世界へようこそ」の講義を一教員として担当した。高校の授業から大学の講義への橋渡しとしての1時間30分の授業である。そこで自らの専門と大学での講義に準拠して「ヨーロッパを学ぶ、日本を知る」と題し、身近な例からヨーロッパ文化の特質を見出し、そこからさらに翻って自らの基盤たる日本を再考するという内容を設定した。

とはいえ、実施に際しては少なからず留意すべき点があった。まず1時間30分という授業時間は、もちろん高校生にとっては今までのほぼ2倍の長さであり、使用する術語のレベルも考慮しなければならない。あるいは大学入学直前の彼らの関心事は何か。こういった現役大学生との相違への配慮に加えて、「学問の世界へようこそ」と題された1時間30分の中で“伝えるべきことは何か”を熟考する必要があるがあった。

普段持っているヨーロッパのイメージ、生活のなかのヨーロッパ由来の要素と日本古来の事柄。こうした身近な事例から「ヨーロッパとは何か、日本とは何か」という「学問」の世界に足を踏み入れ、自らの好奇心と探究心を同行に歩みを進める。今回の私の授業では「ヨーロッパを学ぶ」を指標に、大学における「学問」の方法を平易に伝えることを目標と定めた。

そして次は教材であった。“学問とは自ら考えること”を念頭に、導入部として、提示のための写真や絵とともに質問形式のプリントを用意する。「ヨーロッパ、そのイメージは?」「日本とのちがいは?」「日本と似ているところは?」「自然—気候、地形、動植物」「文化—生活、社会、思想」、こうした身近な問いかけから学生の関心を引き起こし、続いてヨーロッパの文化・思想を具体的に紹介する。ヨーロッパ研究の領域は多様であるが、ここでは古典古代（古代ギリシア・ローマ）とキリスト教を二つの軸と据え、今から「学問」の世界の入り口に立つ彼らにアプローチを試みる。日本でも親しまれている年中行事やカレンダー、欧米の人名やブランド名の由来、神話・宗教に基く楽しい話題—“エンジェル”と“キューピッド”のちがいは?等々。

これらの平易な項目から、ヨーロッパの歴史と特質を探ってゆく。しかし同時にこうし

たプロセスは、彼らにとって楽しいものであって欲しい、また、かくあるべきであろう。そして何事も最初が肝要である。― そのようなことを考えつつ、次のステップに進む。「古代ギリシア・ローマの伝統とオバマ大統領の共通項は?」「ビル・ゲイツ氏の現在のポジションは?」「彼と日野原重明氏に共通する理念とは?」これら誰知らぬ者のない現代の著名人3名については、写真を掲載し視覚的効用も借りて興味を喚起させる。― こうして得たヨーロッパに関する認識を、自身の現在に照らし合わせることによって、さらに「日本」の諸相が明確になるはずである。

さてブリッジ・カレッジ当日、教室に入ると、すで「英語コミュニケーション」の授業を終え英語担当講師とともに昼食を済ませた学生たちは、互いに随分打ち解けた様子であった。昼食のためグループを形成した机配置がそのままになっていたが、特に支障はないと判断しそのまま授業に入った。そのため授業においては若干の私語があったが、講師の質問に対して互いに意見を交わすなどむしろ積極的な姿勢が生まれ、結果的には良い効果をもたらしたようである。

自己紹介から始め、「ヨーロッパ、そのイメージは?」、「日本とのちがいは?」等の質問に、指名するまでもなく発言する学生や、少々控えめでもひと言ふた言の問いかけを機にヨーロッパについて自らの関心を披露する学生など反応は様々であった。今までの倍の長さの授業をいかに持続させるかがひとつの気掛かりであったが、「民主制」「慈善」等に見る「ヨーロッパの伝統と日本の現在」というまとめに至るまで、視覚資料の提示、応答、解説を交えほぼ最後まで集中は途切れることはなかった。特段ゲーム的な要素は導入しなかったにも拘わらず、学生たちは授業を楽しんでいる様子で、質問に対する反応や参加も充分積極的であり、彼らの自ら考えようとする姿勢はまさに期待以上のものであった。

「学問の世界へようこそ」担当にあたり、1時間30分の講義構成を練りながら常に念頭にあったのは、“学問とは何か”“大学においてそれをいかに指導するのか”という根本的な問いであった。大学における教育の根幹に位置するこの課題は、にも拘わらず日常の諸々の中では見失われがちである。しかし、“大学”に期待を膨らませてやってくるであろう学生たちの最初の授業を担当する者の責務として、今回この基本的な課題を改めて問うことができたのは一教員として得がたい機会であった。

また何よりも、この授業に参加した学生たちの「学問の世界」に対する生き生きとした反応を目の当たりにできたことは、彼らの「学問」への関心とその資質を再認識し、同時に教員としての責任を改めて自覚し姿勢を正すに十分な経験となった。